

洋食屋じゃぽんの料理帖  
ソップからはじまるフル・コース

---

左京 潤



富士見L文庫



Restaurant Japon  
MENU



すり流し風ソップ

—— 記憶喪失の青年を添えて

5



ジャガ芋のサラダ

—— メヨネイズと煉瓦街のデザート仕立て

108



挽肉のステツキ

—— 新鮮な牛酪と陰謀のソースで

171



柚子の砂糖菓子

—— 洋食屋『じゃぼん』風

218

エピローグ

310

あとがき

316





## すり流し風ソップ

—— 記憶喪失の青年を添えて

—— 時は明治の半ば。立春を越えてもなお冷え込む如月の明け方前。

銀座の老舗料理屋『津ざき』の二階で店の誰よりも早く目を覚ました津崎柚子は身支度を整え、住み込み部屋の障子をそろりと開けた。

底冷えする廊下を踏み、他の奉公人たちを起こさないよう注意しながら階下へ向かう。狭くて急な階段を降りた先に『津ざき』の上台所がある。

御一新前から続くこの店の上台所は二十人がいっぺんに働けるほど広い。東京では珍しい上方風の造りで、よく掃き清められた土間には竈が並び、壁沿いには足つきの作業台や流し台がいくつも設けられ、隅には井戸も掘り抜かれている。

昼間は大層な活気に満ちている台所だが、さすがにまだこの時間には誰の姿もない。

かじかむ手を擦りあわせながら土間へと降り、柚子は壁の名札掛けの一番後ろに吊されている自分の木札をくると返した。—— 『見習い』『津崎柚子』

その足で井戸へと近づくなりしりと重い釣瓶を手繰る。汲んだばかりの水を鍋へ移すと手の甲へしぶきが跳ね、その冷たさにちよっと残っていた眠気もぱっと吹き飛んだ。

鍋いっぱいの水を用意した柚子は包丁を拭き、箆に積まれた慈姑をひとつ取り上げる。まず芽の先を斜めに少し切り落としたあと、底の部分が平らになるよう刃を入れる。そうしておいて、底から芽の方へ六角になるように剥いていく。

芽を切り落とさないよう注意しながら、ひとつ、またひとつ。寒さに強張っていた手が少しずつ温まり、動きもだんだんと滑らかにくなっていく。

静かな台所に自分が動かす包丁の音だけが聞こえる。柚子はこのひとときが一等好きだ。まるで、この心地よい世界を独り占めしているような気分になる。

慈姑の剥き方は、かつてこの店の立板をしていた兄の日向に教わったものだ。当時を思い出した柚子は懐かしさに目を細めてしまう。——あれは確か、正月のお節作りを手伝ったときの事だったか。まだ幼かった柚子がたどたどしい手つきでようやく一つ剥き終える頃に、十も歳の離れた兄はもう七つも八つも剥き終えてしまっていたものだったっけ。

父と兄をいっぺんに亡くした柚子が見習いとしてこの店へ入ってから四年が経つ。

柚子は今年で十八歳。年頃だというのに白粉も付けず、油気のない髪を無造作にまとめているだけ。地味な色合いの着物の懐には高そうな片硝子の懐中時計が挟んであって、帯の上にこぼれた銀の鎖は柚子が包丁を動かす度にきらきらと揺れた。

「あっ」

不意につると手が滑り、剥いたばかりの慈姑がぼちゃんと水に落ちる。

それと同時に、柚子の耳に声が聞こえてきた。

「——……せーん、すみませーん」店の外、勝手口の前で誰かが店の者を呼んでいる。「あの、おはようございますー」

「！ はあい！」

ああ、またやってしまった。柚子は急いで包丁を置いた。一体いつから呼んでいたのだろう。夢中で包丁を動かしているといい、周りの音が聞こえなくなってしまう。

「——どうもー、毎度お世話になってます、鹿島屋です」

慌てて勝手口を開けると、野菜の籠を抱えた長身の少女がにこにこしながら会釈する。

「いやー、朝早くにすみません、今日も大層冷えますねー……って」べらべらと勢いよく喋っていた少女が不意に目をぼちくりさせた。

「なあんだ、ゆずこじやないの」

「千代ちゃん！」

見知った顔に柚子も思わず声をあげる。

千代ちゃん……鹿島千代は『津ざき』の先々代から付き合いのある仲買、鹿島屋のひとり娘。同い年の柚子とは幼馴染で親友だ。尋常小学校を出てから家業の手伝いをしている千代はしょっちゅう『津ざき』へ御用聞きへとやって来る。

けれども、こんなに早い時分に顔を出すのは初めてだった。

「珍しいね。こんな時間に一体どうしたの？」

「うん、ここの親方に頼まれてた品、朝一に届けろって注文でねー。若い衆の手が足りなくてあたしにお鉢が回ってきたってわけ。ったく、あたし朝弱いのにさー。はい、これ」  
「莢豌豆!？」

柚子は声を上げてしまう。豌豆は春の野菜。如月の今時分では走りにしたって早すぎる。

「ふふ、我が鹿島屋に不可能は無いのよ」野菜籠を抱えた千代がにっかり笑った。「あ、ついでに他の野菜も持ってきたから宜しくねー。今日は山芋に百合根に露の臺に大根」

「ご苦労さま。千代ちゃんこの野菜、いつも質が良いって親方が褒めてたよ」

「当然でしょ」と千代が胸を張る。「何せ、うちの母さんは東京一の目利だからねー!」

「あれ、そう言えば、今日は寅吉ちゃん留守番？」

柚子はひょいと千代の後ろを覗き込んだ。何時も千代についてくる彼女の弟、鹿島屋の跡取り息子、寅吉坊の姿が見えない。さすがにこの時間では起きられなかったのだろうか。

「ああ、あの子、風邪引いちゃってねー、せがまれたけど無理やり置いてきたんだー」

ため息交じりに千代が答える。

「……あの子さー、しょっちゅう熱出すのよ。ほんっと食が細くて、やれあれが嫌いだ、これが嫌いだのってろくにご飯食べなくてさー。お陰で身体も小さいし、うちの跡取りでしょ? 何とかならないかとは思うんだけど、無理に詰め込むわけにもいかないしねー」

「そうなんだ……」

……言われてみれば、寅吉の手足は子どもにしても随分と細かったように思う。子どもは食べるのが仕事みたいなものだ。そう食が細くっては千代もさぞ気懸かりなことだろう。

「ていうか、ゆずこ」、ふと、千代が話を変えた。

「まだ夜明け前だったのに、あんたいつもこんな時間から働いてんの？」

「うん。やることはいくらかもあるし、皆が起きてくる前に墓参りにも行きたいし」

「……もしかして、あれ、全部ゆずこの仕事なわけ？」

下拵え前の野菜が山と積まれた作業台を一瞥するなり千代が呆れた顔をする。

「どう見たって一人でこなせる量じゃ無いと思うんだけど、体よく押しつけられてるとかじゃないの? ……そもそも、あんた、いちおう『津ざき』のお嬢さまなのになさー」

「……今はただの見習いだったば」柚子は思わず苦笑した。

「これも修業だし、上手くなれるならいくらでもやるよ。何せ四年も見習いやってるのに賄いも任せて貰えない有様なんだから、こんなんじゃ天国の兄様たちに笑われちゃう」  
もっともっと頑張らなきゃ、と柚子は思う。

「一生懸命働いて、早く皆に認められて、一人前の料理人にならないと」

「……ほんと、良くやるわ」

やれやれ、と言った顔で千代が呟いた。

鹿島屋へ帰って行く千代を見送ってから一刻ほど後、ようやく朝仕事を一通り片付けた。柚子は前掛けを外し、草履を履き替えて勝手口から店を出た。

大分明るくなってきた空の下、三十間堀の橋を渡って川向こうにある菩提寺へと向かう。父と兄が亡くなってから柚子は墓参りを欠かしたことがない。店の仕事が終わるのは夜遅くになってしまうので、柚子は専らこうして朝に顔を出すことが多かった。

やんわりと白んだ光に包まれた早朝の墓地はとても静かだった。さすがに氷が張るほどでは無いが空気が冷たい。道ばたの雑草には水飴みたいな露がころころと結んでいる。

やがて津崎家の墓が見えてきた頃、小径を歩いていった柚子はふと、足を止めた。

「えー」

柄杓を挿した水桶を提げたまま、柚子は目をぼちくりさせる。

薄い木漏れ日の中に誰かが倒れている。それも、丁度柚子の家の墓の前に。

それは洋装姿の男だった。俯せているため顔は分からない。奇妙な事に、その身体は雨が降ったわけでもないのにじっとり濡れている。お陰で男の周りの土はぐると湿って、何だかまるで懐紙に載せられた揚げ物みたいだ。

恐る恐る近づいてみると、濡れた白い襯衣の背中が僅かに上下しているのが分かった。どうやら眠っているらしい。けれども、どうして、うちの墓の前で。

(……困ったなあ)

柚子は思わず眉根を寄せてしまった。この銀座界限ではいつ厄介ごとと巻き込まれるか分からない。見るからに怪しそうなこういう人間にはなるべく関わたく無いところだ。

けれども、素知らぬ顔で墓参りを済ませようにも、彼が眠っているのは自分の家の墓の前なのだ。いくら何でも素性不明の人間の背中越しに線香をあげるわけにもいかない。

(仕方ない、いったん起こして何処かへ行って貰おう)

眠っている人間を起こすものしびないが、そもそもこんな場所に横になっているのが悪い。心を決めた柚子は着物の裾を抑えてその場にかがみ込んだ。

「あの、すみません」

濡れた肩へ触れるとひやりとした感触の奥に体温を感じる。

最初は遠慮がちに揺すぶっていたものの、男は一向に目覚める気配がない。だんだん業を煮やした柚子はつい手に力を込めてしまう。

「あの！ ちょっと！ 起きて下さい！ 起きて下さいってば！」

思いきり揺すぶってやると男がようやく小さな声を立てた。どうやら目を覚ましたらしい。身しろぎした男がやがて、のろのろと身体を起こす。

その顔を目にした途端、柚子はどきりとしてしまった。

まるで異人のように見えた。

すらりと高い鼻梁に、くつきりとした二重の目と大きめの口。濡れた髪はまるで飴細工のよう。はっとするほど彫りの深い顔立ちにやわらかな朝の光が影を落としていく。

思ったより若い。十八の柚子よりいくらか上だが、まだ青年と言っても良いような年齢だ。日本人離れた容姿に飲まれそうになるのを堪え、柚子は真っ直ぐ青年を見据えた。

「ここはうちの墓です。寝たいなら、何処か別の処へ行って下さい」

きっぱりそう告げてやるが、青年は黙ったまま目をすがめて濡れた髪を掻き上げる。

やっぱり異人さんかも、と柚子は思った。築地に居留地がある為、界限には昔から異人が多い。言葉が通じないとしたら厄介だ。身振り手振りで退いて貰えるだろうか。

柚子がそんな心配をしていると、黙り込んでいた青年が徐に口を開いた。

「――あまね」

「え」

「周。俺の名だ。……多分」

流暢な日本語だった。どうやら言葉が通じないというのは杞憂だったらしい。しかし、

不審者にいきなり名乗られても対応に困る。

「……別に、あなたの名前は聞いてないです」柚子はぶっきらぼうに答えた。

「とにかく、早くここから去って……」

「少し待て」青年が柚子の言葉をびしゃりと遮る。「いま、頭を整理している」

「え」

思わず言葉を呑む柚子の前で、青年が考え込むように「ふむ」と唸った。

「……妙だな。自分の名前は覚えてるが、俺が一体どの誰なのか、どうしてここに居るのか、全くもって思い出せない」

なるほど、と青年が頷いた。

「これが、世に言う記憶喪失というやつか」

まるで他人事のようにさりりと言う。

――しばし、沈黙が流れた。

「あの、あまりに落ち着き払った様子の青年に、柚子はつい口を挟んでしまう。

「話が全くもってこれっぽっちも見えないんですけど、それ、普通に一大事ですよね？」

「ああ、そうかもしれない」

「それにしても、随分落ちついてるように見えますが……」

「しかし、ないものはない、青年が淡々と答えた。

「別にその辺を探して見つかるものでもなし、焦ったところでどうしようもないだろう」

「それは、そうですね……」

嘘か、本当か、それとも単なる冗談か、柚子にはさっぱり分からない。ただひとつ言えるのは、目の前に座り込んでいるこの青年がどうにも怪しいと言うことだけだった。



矢張り、知らん振りをした方が賢明だったか。そんなことを考え始める柚子だったが、当の青年は相変わらず平然とした顔で「しかし、驚いたな」なんて独りごちている。

「記憶喪失などと言うものは、ドラマや漫画の中だけの出来事かと思っていたが……」  
「……どらま？ まんが？」

耳慣れない言葉に柚子は目をぼちくりさせた。いったい何の事だろう。

「ふむ……」口にした当の青年も、なんだか怪訝けげんそうな顔で首を傾かげてみせる。

「ふと口をつけて出てきたが、それが一体なんだったのかさっぱり思い出せない。なるほど、これが記憶喪失というものか。実に興味深い」

（……なんなんだろう、この人は）

奇妙な服装といい、奇抜な言動といい、やはりどう考えても怪しい。記憶喪失だなんて出任せでこちらの同情を誘い、金銭でもせびる腹はらづもりなのではないだろうか。

そんな疑念を深める柚子の前で、青年が不意に立ち上がった。

「！」

柚子は反射的に身構える。

これまでちっとも気づかなかったが、立ち上がった青年は思っていたよりずっと背が高く。柚子の身体はすっぱり青年の影に入ってしまう。

思わず顔を上げると、餡細工みたいな青年の髪が逆光にきらきら光って見えた。身の丈

や服装と相まって、本当に煉瓦街れんががで見掛ける異人のようだ。

「……やはり、財布はないか」

洋袴ずばんの腰回りを探りながら呟つぶやき、青年がふと、柚子を見やる。

「すまないが、街はどの方角だ？」

「え……は、はあ、大通りならあちらですけど……」

反射的に煉瓦街の方を指すと、青年は「感謝する」と言うなりさっさと歩き出した。

「あの、一体どうされるんですか」

好奇心からつい訊きねると、律儀に足を止めた青年が少し面倒くさげに振り返る。

「決まっているだろう。記憶も金も無いのだから、まずは仕事を探さなければ」

「仕事を」柚子は思わず鸚鵡おうむ返ししてしまった。

……確かにそうだろうが、記憶喪失で目覚めた直後に職探しとは少々思い切りが良すぎるのではないだろうか。普通、まずは交番にでも行くと思うのだけれど。

「まあ、身元不明では碌えな仕事もないだろうが、このさい背に腹は替えられない。日雇いで現金を手に入れて安ホテルを探すか、なんなら当分は漫画喫茶にでも泊まって……」

「まんがきっさ……？」

「まんがきっさ？」青年が怪訝な顔をする。「なんだ、それは」

「たった今、あなたが……」

「とにかく、こんなところで無駄話をしている暇はない」  
 柚子の言葉をびしやりと遮り、青年が再び踵を返す。  
 青年の足は大層速かった。呆然と立ち尽くす柚子の視界の中、濡れた襯衣の背中が墓石の群に吞まれ、あつという間に見えなくなってしまう。

「ええと……」

青年が消えていった方を眺めながら、柚子は思わずぽつりと呟いた。

「……一体、何だったんだろ」

まるで青天の霹靂のようだった。

墓地は既に何時もの平穏を取り戻し、先程の出来事の残滓はもはやどこにもない。やわらかな朝の光と冷たい空気。柚子はなんだか夢でも見ていた様な心持ちになってしまう。

それにしても、特に何を要求するでもなく立ち去ったところを見ると、記憶喪失というのも案外本当だったのかも知れない。だとしたら、少し悪いことをしてしまったかも。

（そう言えばあの人が、仕事を探すとか言ってたけど……）

ふと、厭な感じが胸を過ぎった。

乞われるまま教えてしまったが、煉瓦街の方には近頃、人買い同然の質の悪い手配師が跋扈していると聞く。もし先程の彼の言葉が本当だったとして、右も左も分からぬような記憶喪失の青年などは格好の獲物ではないだろうか。

（……まあ、別に大丈夫だよな）

あの青年は身体も大層大きかったし、いくらかわわっているものの、それなりに思慮深そうに見えた。たとえ記憶がなくなっても自分の身くらい自分で守れるだろう。

それに柚子だって忙しい。店を抜け出してきた手前、早く戻らなければ睨まれてしまう。

……でも。

ちょっと迷って、柚子は手にした水桶を置いた。

桶の底が地面へ当たって水面がちやぶんと大きく揺れる。

「父様、兄様、母様、ごめんさいっ……!!」

やはり、記憶喪失だという青年を見過ごしてしまったのは不親切だったように思う。このままでは気になって仕方が無い。せめて交番へ連れていかななくては。

家族が眠る墓へ頭を下げ、柚子は急いで青年の後を追った。

——銀座煉瓦街。江戸情緒を残す下町の向こうに突如現れる西洋街区へ飛び込むと、まるで異国にでも迷い込んでしまったかのような錯覚に陥ってしまう。

幅十五間の大通りにひしめく洋風二階建ての店々は早朝と言うこともあってまだ何処も閉まっている。それでも通りには既にちらほら人の姿があった。

大通りへと駆け込んだ柚子は瓦斯灯の下に立ち、きよろきよろと辺りを見渡した。

高い背丈と、白い襯衣と、明るい色の髪……幸い、目的の人物はすぐ見つかった。四丁目の角、時計台のある店の軒先で、先程の青年が麦稗帽を被った男と何やら話している。

「——兄さん、記憶がないんですって!」帽子の男が驚いたような顔で聞き返す。

「はああ、そりゃあ大変だ。さぞかしお困りでしょうねえ」

「さしあたって、仕事を探している」

「それなら丁度良いのがありやすぜ」帽子の男がにこりと笑った。

「一寸離れた土地になりやすが、誰にでも出来る楽な作業で日当は相場の倍以上、しかも住み込み食事付きだから、余分な金は他に一銭だって使わずに済むって寸法でさあ」

「それは助かる」

「ええ、ええ、そうでしょうとも!」帽子の男が大げさに頷いてみせる。

「何せ人気の仕事だから、空きなんざ減多に出ねえんだ。希にあっても直ぐ埋まっちゃう。兄さんは本当に運が良いねえ。さあ、そうと決まれば早速、あつしと一緒に……」

「何やってるんですか!」

慌てて駆け寄る柚子に気づくなり、周青年が「ああ」と顔をあげた。

「また逢うとは奇遇だな。ちょうど今、仕事が決まったところで……」

「いいからこっちへ来て下さい!」

吾気に告げる青年の腕をぐいと掴み、柚子は彼を無理やり裏通りへ引っ張っていった。

「あなた、どうかしてるんですか!」大通りから少し離れた路地でようやく手を離し、柚子は件の青年を思いきり叱りつける。

「あんなの、どう考えても人買いじゃないですか! うっかり口車に乗ったら開拓地のタコ部屋へ売り飛ばされて酷い扱いを受けますよ!」

柚子の背中に寒気が走った。騙されて遠い土地へ連れていかれた人間は粗末な食事できつい仕事を科せられ、耐えかねて脱走すれば厳しい折檻が待っていると聞く。いくら見ず知らずの他人とは言え、このまま見過ごしてしまっていたら一生後悔していただろう。

「別に問題はない」しかし、当の青年は平然と応えてくる。

「食事と寝床さえ貰えるなら、どんな仕事でも構わな……」

「構って下さい!」

思わず声を荒らげてしまうが、周青年の方はどこ吹く風といった様子。食事と住居さえ確保されるならそれで良いと、どうやら本気でそう思っているらしい。

柚子はなんだかどっと疲れてしまった。わざわざ追い掛けてきたのが馬鹿みたいだ。

(……もう、放って帰ろうかな)

しかし、さすがにそういう訳にもいくまい。うっかり関わってしまった自分の不運を呪

いながら柚子は青年を一瞥した。

「とりあえず交番へ連れていきます」と有無を言わさぬ口調で言い放つ。

「もしかしたら届けが出ているかも知れないし、今後の身の振り方について相談も……」  
 ぐう、と小さな音に柚子は言葉をつまんだ。淡々としたその態度からは窺えなかったが、  
 どうやら青年は腹を空かせているらしい。

(……ああ、もう、仕方ない)

「……先のうちのお店へ寄りますよう」、ため息交じりに言いながら柚子は踵を返した。

「握り飯くらいなら用意しますし、亡くなった兄ので良ければ着物も貸してあげます。勿  
 論、後でちゃんと返して貰いますけど。人買いについて行くと言うならどうぞご自由に。  
 辛い、あの手の輩なら煉瓦街にうようよしています。わたしも、もう止めませんから」

それだけ告げるなりさっさと歩き出す。

これ以上のお節介は無用だ。もし食事や着替えが必要なら勝手にしてくるだろう。  
 足早に店へ向かっていると、しばらくして、背後に気配を感じた。

「——本当に良いのか」

先程の青年が柚子の傍らへ並びながら訊ねてくる。

「……まあ、それくらいなら、大した手間でもないですし」柚子は半眼で答えた。

「好きでタコ部屋へ行こうとするような人がどうなろうと知った事じゃありませんが」

「助かるぞ、お人好しの少女」

「……誰がお人好しですか」柚子は呆れ顔で訂正する。うっかりつけ込まれては心外だ。

「変な呼び方をするのはやめて下さい。わたしは柚子です。津崎柚子」

「——ありがとう、ユズ」

「……!!」

何気なく青年が口にした途端、柚子の心臓がどくと跳ねた。

思わず、足を止めそうになってしまう。

「どうした、ユズ」青年が怪訝そうに訊ねてくる。

「……いえ、何でも」、と柚子はぶっきらぼうに首を振った。

「それより、急いで下さい。わたし、これから仕事なので」

——『ゆず』。

亡くなった兄も柚子の事をそう呼んでいた。兄の優しい声を思い出し、柚子はなんだか  
 少しくすぐったいような、切ないような気持ちになってしまう。

(……って、これ位の偶然で動揺するなんて情けない)

心持ち足を早めながら柚子は心の中でそう呟いた。

煉瓦街の大通りを離れて三十間堀沿いを新橋方向へ下ると『津ざき』の門が見えてくる。

高い塀で囲まれた敷地はそれほど広くはないが、二階建ての大店おおだなは立派なものだ。庭木も手入れがよく行き届いている。

「——『津ざき』……」

門柱に掲げられた看板を眺め、周青年がふむ、と首を傾げた。

「ユズの苗字と同じだな。随分立派な屋敷だが、ここはユズの家の家なのか？」

「別に、あなたには関係ありません」

柚子は素っ気なく答える。行きずりの人間に身の上を話す趣味は無い。……しかし、この云い方では肯定と取られ兼ねないと考え直し、柚子はあとから言葉を付け加えた。

「わたしは只の住み込みの見習いです。そんなことより、食事と着替えを持って来ますから、あなたはここでちょっと待って……」

「住み込み」青年が興味深げに呟く。「この店では住み込みを雇っているのか」

「……もしかして、うちで働きたいんですか？」

そう言えばこの青年は仕事を探していたのだった。何せ、食事と住まいを与えてくれるなら人買いについてもいいという位だ。余程住み込みの仕事につきたいのだろう。

「生憎あいにくですが、うちの奉公人は身元のはっきりしている人間じゃないと駄目ですよ」柚子はすかさず釘を刺す。

「何せ『津ざき』と言えば、銀座では少しは名の知れた老舗料理屋ですから」

「料理屋」不意に青年が目をすがめた。

「もしかして、ここは料理屋か」

「そうですね、何か問題でもあるんですか？」

思わず聞き返す柚子の前で、青年がぼつりと呟いた。

「——俺は料理が大嫌いだ」

淡々としているのに、ひどく重い声だった。

「……はあ、そうですね」

柚子は何だか少しムッとしてしまう。別にこの青年が料理が好きでも嫌いでも構わないが、何も料理屋の人間の前で言うことは無いだろう。

それに、柚子は料理が大好きだ。それを面と向かって貶げされれば良い気はしない。

「まるで、料理に親でも殺されたみたいな事を言うんですね」

つい、厭味いらいみっぽい口調になってしまいが、当の青年は真顔で「そうかもしれない」なんて答えてくる。

「少なくとも、俺は料理をする位なら毒でも呷あがった方がマシだ」

「……へえ、それは随分ですね」

何だか急に馬鹿らしくなって、柚子は小さなため息をついた。素性も知れないような青年と張り合ったところで仕方が無い。それより、さっさと用事を済ませよう。

「いいからここで待っていて下さい。今、食事と着替えを持ってきます。……店の皆に見つかったら面倒なので、くれぐれも店には入らないで下さい。分かりましたね」  
 しっかりとそう念を押し、柚子は店の裏木戸を潜った。

「——お早うございます、ただいま戻りました……」

「こんな時間までどこほつき歩いていやがった！」

勝手口の戸を開けたとたん罵声を浴びせられ、柚子は思わず背筋を伸ばした。

柚子が墓参りへ出ている間に起き出してきたのか、台所には三人の兄弟子たちが待ち構えていた。うち一人は既に焼き方の控えを任されている少し年嵩の男で、残りの二人はその取り巻き。こちらの二人は立場的には柚子と同じ見習いだ。

「一番下っ端の分際で俺たちより後に台所に入るなんてどういう了見だよ」兄弟子が大機嫌そうに舌打ちする。「まったく、先代の娘だからって好い気になりやがって」

「さすが柚子お嬢さまだ」尻馬に乗った取り巻きたちがはやし立てる。

「こんな時間に悠々ご出勤とは、我々とはご身分が違いますねえ」

「お嬢さまにとっちゃ、料理人の修業も単なるおままごどって訳ですかい」

「遊びなら辞めちまえよ」と兄弟子が吐き捨てる。「まったく、これだから女は」

余りに一方的な物言いに柚子は少し目をすがめた。けれども、これくらいは慣れっこだ。

「——妙ですね。野菜の下拵えも、洗い物も、掃除も、やるべき事はちゃんと終わらせてあつた筈ですが」兄弟子たちを見据え、落ちついた声で堂々と云ってやる。

「本来兄弟子さん達がやるべき仕事までやっておきましたが、問題でもありませんか」

「それは……」……「……ちっ」凜とした態度で聞き返してくる柚子に見習い二人は顔を見合わせた。そんな取り巻きたちの不甲斐なさに兄弟子が舌打ちする。

「……仕事は全部終わらせたって？」兄弟子がかからうように柚子を見た。

「しかし、そいつはおかしいな」

「え」

柚子は目を見開いた。

止める暇も無かった。柚子が洗って箆へ上げておいた野菜を兄弟子が足下へぶち撒ける。

思わず言葉を失う柚子の目の前で、山芋が、百合根が、路の臺が、千代が届けてくれた野菜たちがごろごろと土間を転がった。

「おいおい、土だらけじゃないか」兄弟子が土まみれになった芋を草履で蹴る。

「一体、こいつのどこが洗ってあるってんだよ」

「やれやれ、とんだ嘘つき女だ」取り巻きどもも待ってましたとばかりに騒ぎ始めた。

「これで仕事した気になってりゃ世話はねえや」「まったく、本当に使えねえ女だな」

「おい、なに呆けてる」年嵩の男が面白そうに嗤う。「とっとと拾えよ。お嬢さま」

柚子は思わずくちびるを噛んだ。兄弟子たちの意地悪には慣れっただが、さすがにこれは応える。何より、千代が届けてくれた野菜を粗末にされた事が震えるほど口惜しい。

「こいつ、随分不満そうな顔しやがって」取り巻きどもがニヤニヤしながら柚子を見た。

「まさか、兄弟子に口答えしようってのか」「そんなこと、出来るわけねえよなあ」悔しいが、彼らの言う通りだった。ここでの上下関係は絶対だ。どんな理不尽であれ、兄弟子の命令には従わなければいけない。逆らえば店を追い出されてしまう。

そして、柚子にはどうしてもここに居続けなければならない理由があった。

(……こんな厭がらせ、いちいち相手にするだけ無駄だ)

喉元までせり上がってきた熱い塊をどうにかお腹の底へと追い返し、柚子は黙って土間に膝をついた。

「——待て」

土にまみれた野菜を拾おうとした瞬間、誰かが頭上から制止の声を掛けてくる。

顔をあげた柚子は思わず目を瞬かせた。

仰ぎ見るような長身と、異人のように彫りの深い横顔。

いったい何時の間に入ってきたのだろう。先程店の前に待たせておいた筈の青年が柚子のすぐ傍らに立っていた。

「って、どうしてあなたがここに居るんですか！」柚子は声を上擦らせる。

「わたし、店には入るなって言いましたよね!」

「何やら怒鳴り声が聞こえたから様子を見に来た」

悪びれもなく言い放つなり、周青年が兄弟子たちへと視線を移した。

「話は大体聞いていた。その男がやったのだから、ユズが拾ってやる必要はない」

「お、おい!」

突然の闖入者にぼかんとしていた兄弟子たちが我に返ったように叫ぶ。

「なんだてめえは! よそ者が台所に口出すんじゃないねえ!」「俺たちに楯突いてただで済むと思ってるのか!」「こいつ、妙ちきりんな格好しやがって!」

血相を変えて詰め寄る兄弟子たち。

そんな彼らを、青年が静かに一瞥した。

「——そもそも、お前たちも料理人の端くれだろう」青年が冷ややかに目をすがめる。

「これほど良い食材を足蹴にするような奴らに、料理人を名乗る資格はない」

柚子は思わず目を瞠った。

それはまさに、柚子が彼らに言ってやりたかったことだ。下っ端の自分には言いたくても言えなかった言葉を代わりに言って貰えたお陰で、つかえていた胸がすうとする。

(まあ、料理が大嫌いだって人に代弁されるのも複雑な心持ちだけど……)

「っ……!」



兄弟子たちの顔が怒りに赤くなる。  
やがて、年嵩の兄弟子が堪えかねたように青年へ掴みかかった。  
「くそっ、てめえっ！」

「——君たち、一体、何の騒ぎだね？」

涼やかな声が台所に響いた。

思わず動きを止める一同の前で、何者かが勝手口から姿を現す。

悠然と入ってきたのは、料理屋の台所には似つかわしくないほど綺麗な男だった。

おそらく東京中を探してもこれほど美しい男は滅多に見つかるまい。切れ長の目に薄いくちびる。はっとするほど端正な顔立ちに、上品な灰色の三つ揃いがよく似合っている。

歳は三十に届くか届かないかと言ったところ。しかし、年齢に似合わぬ威厳があった。

「わ、若旦那！」青年の胸ぐらを掴んでいた兄弟子が慌てて手を離す。

「おや、これは随分な散らかり様だ」

野菜が散らばった土間を見渡し、若旦那と呼ばれた男が物憂げに目をすがめた。

「この有様は私の店に相応しくないね。君たち、直ぐに片付けたまえ」

「「へ、へえっ！」」

命令られるや否や土間へと這いつくばり、兄弟子たちは我先に汚れた野菜を拾い始める。

しかし、柚子は彼らに加わるでもなくその場に立ち尽くした。

「俊輔さん……！」

「やあ、元気にしているかね、可愛い従妹、の」

にこりと親しげな微笑みを浮かべ、美貌の男がつかつかと柚子へ歩み寄ってくる。

反射的に身構える柚子の前で、男がふと、わざとらしく眉根を寄せた。

「……ああ、これは酷い」柚子の指先へ視線を留めて大げさに嘆いてみせる。「そんなに手を荒れさせてしまって、可哀想に。此所の仕事はそれ程までに大変なのかね」

「……いいえ」指先を隠した柚子がきつと強いまなざしを男へ向ける。

「別に、そんなことはありません……」

「いくら料理屋の娘とは言え、女だてらに料理人を志すなんて君は本当に変わっている」  
柚子の言葉を遮りつつ、男が大げさに肩をすくめてみせた。

「まったく、君の後見人を任されてからというもの、私はいつも気苦労が絶えないよ」

「後見人……」

柚子は思わず目をすがめた。

——津崎俊輔。四年前、父と兄を亡くした柚子の後見人に名乗り出て、津崎家と『津ざき』を奪った男。悪態をつきたくなるのを堪え、柚子は冷ややかに男を睨んだ。



「……その新しい洋装も、父様のお金で仕立てさせたんですね」  
 精一杯の皮肉を込めて言ってるが、俊輔は悪びれもなく「ああ」と頷く。  
 「君の代わりに津崎の家を任されたからには、それなりの格好をしなければね。どうだい、よく似合っているだろう」

「っ……」

渾身の厭味をあっさり躲され、柚子は口惜しげにくちびるを噛む。

そんな柚子を愉快そうに見下ろし、俊輔がふと、柚子の耳元へ顔を近づけた。

「――君の部屋は、そのままにしてある」まるで子供を諭しつけるような口調で囁く。

「このまま料理人を目指しても、君にとって良いことは何もない。辛かったら、いつでも屋敷へ戻って来なさい」

「……お断りします」

柚子はきつぱりと首を振った。そのまま、毅然とした表情で俊輔を見据える。

「あなたに心配して貰うことは、何もありません」

「くっ……つれないなあ」

やれやれとでも言った様子で肩をすくめた俊輔が、不意に視線を移した。

「ところで、其方は一体、どなただね？」

俊輔の視線の先には例の記憶喪失の青年の姿がある。

異人のように大柄な身体にびしょ濡れの洋装姿。たださえ人目を引く上、本来ならばこの店に居るはずのない人間だ。俊輔が疑問を抱くのも当然だろう。

「その方は……」 柚子は口を開いたが、それより先に青年が前へ進み出た。

「――俺は周と言う、青年が名乗りをあげる。

「若旦那と言うことは、貴方はこの店のオーナーか」

「オーナー？ ……ああ、主人の事か。まあ、そういう事になるかね」

「それは好都合だ」周と名乗った青年が改めて俊輔を見やった。

「もしも可能なら、この店で働きたい」

真顔で、そう申し出る。

「え――」

柚子は思わず目を丸くしてしまった。

思わぬ事態だった。確かに青年はこの店で働きたいようなそぶりを見せていたが、まさか若旦那である俊輔に直談判を持ちかけるとは。

「って、ちょっと！ あなた、何を言ってる……」

すっかり慌てる柚子を他所に、俊輔は「ほう」と興味深げに頷いてみせる。

「君は一体、何が出来るんだね」

「何でも」と周は答える。

「俺は役に立つ。体力には自信があるし、手先も器用だ。人の倍は働くし、余計な口も利かない。寝床と食事さえ用意して貰えるなら給料も必要ない」

「ほう、それは面白い」

周の頭のとっぺんからつま先までを眺め、俊輔が愉快そうに目を細めた。

「良いだろう。早速、番頭へ伝えておこう」

「待って下さい！」 柚子は思わず俊輔へ詰め寄った。

「一体なにを考えているんですか!? 素性もろくに分からない人間を雇うだなんて……」

「前から下男が足りていなかったらう。番頭も何時もぼやいていたし、格安で働いてくれると言いうなら悪い話ではないと思うがね」

「けれども、実際に一緒に働くのはわたし達です！ 何か問題でも起きたら……」

「——親方は、まだ河岸か」 一方的に会話を切り上げ、俊輔が辺りを見渡した。

「仕方がないな、戻ってくるまで暫く待つとしよう。……しかし、周君もその格好では仕事も出来ないだろう。柚子、着替えを出してあげなさい」

\* \* \*

……まさか、こんな得体の知れない人と一緒に働く羽目になるだなんて。

『津ざぎ』の二階奥、柚子が寝起きしている住み込み部屋の前。兄の着物を周青年へ渡してやった柚子は、彼の着替えが終わるのを廊下で待っていた。

そもそも、柚子はまだ青年を全面的に信じたわけではない。兄弟子たちの怒声を聞いて台所へ駆けつけ柚子を庇ってくれたところを見るに、それほど悪い人物でも無いように思えるが、何せまだ出逢って一刻も経っていないのだ。信じろと言う方が無理だろう。

(……一応、気をつけておかないと)

柚子は思わずため息をついた。全く、厄介なことになってしまった。今の自分には他人に構っている余裕などこれっぽちもないのに。

……それにしても随分と遅い。柚子は半眼で目の前の障子を見やった。いくらびしょ濡れだったとはいええ、あの周とか言う人は着替えひとつに一体どれだけ時間を掛けるのだろう。先程は「人の倍は働く」なんて自信満々に言っていたけれど、ちっとも当てにはならない。

「……あの、まだですか？」

焦れて声を掛けると、少しの沈黙のあと、ようやく障子が開いた。

「これで良いのだろうか」

「……」

障子の向こうから現れた周青年の姿に柚子は言葉を失ってしまふ。控えめに言つて惨憺たる有様だった。だらしなくはだけた長襦袢の上に着物らしき布がぐちゃぐちゃと巻きつけられている。帯の締め方も滅茶苦茶だし、紺の野袴と来たら何だか妙なところから足が出ているといった始末だ。わざとやってもこうはなるまい。

「……あなた、もしかして着物の着方が分からないんですか?」

すっかり呆れて訊ねると、周青年が流石に少し困った顔で柚子を見てくる。

「どうやら、そのようだ……すまないが、手伝ってくれないか?」

「え」

思わぬ申し出に柚子は目を瞬かせた。

(つて、どうして、こんな事に……)

周青年の長襦袢の襟を合わせてやりながら、柚子は思い切り頬を赤くしてしまふ。……まさか、得体の知れない人と一緒に働くどころか着付けまで手伝う羽目になるだなんて。

柚子が男社会の板場に入って数年経つが、流石にこんな距離で男性に触れるのは初めてだ。ましてや、素肌へ襦袢を着せ付けるだなんてことは。なるべく見ないよう気をつけても、ふとした瞬間に遅しい手のひらや筋張った手首が視界へ飛び込んできてしまつて、その度に心臓がぎゅっとしてしまふ。……本当に、どうして了承してしまつたんだろう。と

にかく、早く終わらせなければ身が持たない。

「……言っておきますけど、わたし、あなたのことを信じてませんから」柚子は気まずさに耐えかねて口を開いた。視線を外したままぶつきらぼうに釘を刺す。

『津ざき』は銀座の料理店の中でも繁盛してる方だから、敵も随分多いんです。あなたが商売敵が潜り込ませた人間じゃないって証拠はありません。……そもそも、記憶が無いというのも本当かどうか」

きつい言い方になってしまふが、青年は気を悪くした風も無く「そうだな」と頷いた。「ユズが疑うのは当然だ。俺だって、目の前に俺の様な人間が現れたとして、その言葉を信じるとは思えない。何たって、どこからどう見ても怪しいからな」

「……一応、自覚はあるんですね」呆れ顔で呟きつつ、柚子はなおも言葉を続けた。

「あと、ここで働くなら、さっきみたいなお節介は金輪際、やめて下さい」

「お節介? 一体、何の事だ」

「……さっき、兄弟子さんへ文句を言ってくれたじゃないですか」ため息交じりに答える。

「正直、わたしも溜飲は下がりましたし、礼は言います。でも、ああして庇われると迷惑なんです。兄弟子さんたちへの対応の仕方はちゃんと分かっています。これまでも、これからも、自分でどうにかしますから、あなたは手を出さないで下さい」

「分かった、留意しよう」

あつさりと頷くが、軽すぎてどうもいまいち信用出来ない。思わず半眼になる柚子の前で、青年は「それにしても」と話題を変えた。

「ユズはこの店の主人と仲が悪いのか。どうも、随分と怖い顔をしていたようだが」

「……あの人は、わたしの敵ですから」

「敵？」周が鸚鵡返しする。

「それは、一体どういう……」

「——はい、出来ました」柚子は会話を打ち切るようにびしゃりと告げた。「ちゃんと見ていましたか。次からは一人で着られるようになって下さい」

こうして着せ付けてやると、亡くなった兄の着物は周青年によく似合っていた。異人みたいな明るい髪色も、地味な色の小紋に不思議とじっくり嵌まる。背格好は随分違うのに、何だかまるで亡くなった兄が帰ってきたような気さえしてしまふ程だ。

「これで完成か」何だか落ち着かなそうに周が呟く。「どうも、動きづらい服だな」

「案外悪くないですよ」と柚子は言っている。

「少なくとも、怪しさは半分薄れました。これなら、少しは信用してあげても良いです。

……それに、お陰でひとつ、手がかりが出来ました」

「手がかり？」

「……あなたの素性についてです」柚子は思わず半眼になった。

「他にいったい何があるんですか。あなた、自分の正体が気にならないんですか」

「勿論、気になるに決まっています。……まあ、いづれ記憶も戻るだろうとは思っているが、やはり少し落ち着かない。早めに明らかになるならそれに越したことは無い」

「それなら黙って聞いて下さい。先程座敷へ上がるときも自然に履き物を脱いでましたし、あなたに記憶がないのが本当だとしても、平生の動作は覚えていた様子です。それなのに着物が着られないということは、あなたは元々洋装で暮らしていたという事です」

「着物を着たことが無いというのはそんなに珍しい事なのか」

「……当たり前です」と柚子は嘆息した。

「生まれてからずっと洋装で暮らしている日本人なんて、居留地の人間か、そうでもなければ高襟好きの華族さまくらいしかいません」

……まあ、記憶喪失の青年の正体が華族の若君だなんて戯曲みたいな話だけれど。

「心当たりがあるんです」と柚子は告げる。

「亡くなった兄様のご友人だった子爵家の西苑寺朔馬さま。あの方なら他の華族さまにもお詳しいし、居留地の方にも顔が良く答です。今度逢ったら訊ねてみようと思います」

「それは心強いな」

「でしょう」と柚子は自信ありげに頷いて見せる。

「今は仕事で欧羅巴へ出てらっしゃるんですけど、確か、もうすぐ戻られる筈で……」

「——ふざけんじゃねえ！」

不意に階下から聞こえてきた声に、柚子は思わず言葉を呑み込んだ。

着替えを終えた周を連れて階下へ降り、そろそろと台所を覗き込む。

張り詰めた空気の中、いかにも職人めいた五十がらみの男が俊輔と睨み合っていた。

「おい、いいか、若造ッ！」

青藍色の着流しに日和下駄を突っ掛けた職人風の男——河岸から帰ってきたばかりの『津ざき』の親方が青筋を立てて怒鳴る。

「この店はな、御一新前から続く由緒正しい料理屋なんだッ！ それがてめえッ、『津ざき』ののれんを掲げながら西洋料理みてえな気味悪いもんを出せるかよッ!？」

西洋料理!？」

柚子は思わず目を丸くした。一体、何の話だろう。

「この店の権利は、私にあります」

端整な顔に笑みを浮かべ、俊輔がきっぱりと言い放つ。

「貴方がどう言うおうが、私の命令には従って戴きます。……なあに、そう大したものじゃあなくて良いんです。要は単なる話題作りですからね。あの『津ざき』が西洋料理を始めたとあれば大層評判になります。最初は簡単な一品料理でも構いません……」

「……女郎の息子がッ」苦々しげに悪態をつきながら親方がどっかと座り込んだ。

「出来ねえもんは出来ねえ！ 俺を敵首にするってんならしやがれ！ 西洋料理なんざ作られる位なら俺は路頭に迷った方がマシだッ！」

腕を組んだ親方が荒々しく咳呵を切る。こうなったらもう梃子でも動きそうに無い。

「やれやれ、参ったものだ……おや」

困ったように髪を掻き上げていた俊輔が、ふと、戸口へ立っていた柚子に目を留めた。

「柚子。君も話を聞いていたのかい」柚子を見やった俊輔が不意に口の端を吊り上げ、まるで何か思いついたように「そうだ」と微笑んだ。

「親方には振られてしまったが、代わりに君が、西洋料理を拵えてみるかね」

思いがけない提案だった。

「わたしが、料理を……」

柚子は思わず喉を鳴らしてしまう。

——見習いの、それも女が作ったものなんざ食えるかよ！

店に来てから四年が経つが、柚子は未だに賄いすら任せては貰えなかった。いくら料理を拵えても見習いと馬鹿にされて誰にも食べて貰えない。毎日数え切れないほどの野菜の皮を剥き、器を洗いながら、柚子はずっと、いつか料理を任される日を待ち望んでいた。そんな機会が突然降って湧いたのだ。

……しかし。

「——お断りします」

柚子はきっぱりと断った。

「わたしも親方と同じ意見です。あなたの気まぐれな思いつきでこの『津ざき』の品書きに西洋料理を載せるだなんて、絶対に賛成出来ません」

料理はしたいが、津崎俊輔の企みに手を貸す訳にはいかない。

しかし、そんな柚子を見下ろし、俊輔がせせら笑うような表情を浮かべた。

「ほう、君は此所で四年も見習いをしてきた癖に、自信が無いのかね」

「……別に、出来ないとは言っていないよ」

柚子は少しムッとしてしまう。

「西洋料理と言っても、料理には変わりありません。調理法と材料さえあれば、わたしにだって十分に拵えられます」

「ほう、大した自信じゃあないか」、俊輔がにやりと笑った。

「ならば、そのご自慢の腕を存分に披露してみせたまえ。料理人になると言って屋敷を飛び出していった君がどれだけ成長したかを私に見せつけてみる。下手なものを持ってきたら、私は口も付けないよ」

「……上等です」目の前の青年を睨めつけながら凜とした声で宣言する。

「分かりました。必ず、あなたも認めざるを得ないような西洋料理を拵えてみせます」

「ほう、それは面白い」どこか馬鹿にしたような口調で言いつつ俊輔が立ち上がった。

「食材は自由に使って良い。他にも必要なものがあれば用意しよう。……まあ、せいぜい頑張らたまえよ、可愛い従妹どの」